報告

［2023年度入試説明会講演］

地域の資料と共に
―学生として、アーキビストとして―

Let's Study Archival Science：From a Graduate

高山 征季
Motoki Takayama

1　はじめに

ただいまご紹介いただきました高山征季と申します。令和２年度にアーカイブズ学専攻の博士前期課程を修了し、現在は、江東区総務部総務課文書係で公文書等専門員として勤務をしております。

本日は、「地域の資料と共に―学生として、アーキビストとして―」というタイトルで、学生時代から現在までの体験談を反省も込めつつお話ししたいと思います。

なお、本日は地域資料ばかりを扱ってきた私個人の体験談をお話しする予定であり、地域資料論を詳しく話そうという意図はありません。地域資料というと「当該地域を総合的かつ相対的に把握するための資料群と捉え、発行者としての行政体と民間（出版社や団体、個人）を問わず、また、主題として歴史、行財政、文学その他を問わず、地域で発生するすべての資料」[1]などと定義される幅広いものになりますが、私が取扱ってきたものは、大学の学部生の頃から大学院までは古文書や郷土誌、自治体史といった資料、修了後はそれだけでなく公文書、写真、地図、モノ資料などの地域に関わる資料になります。

2　自己紹介

2010年４月から2014年３月まで、学習院大学文学部史学科に在学し、高埜利彦先生に指導を受け日本近世史の研究をしました。卒業後はサラリーマンとして主に営業職をしていましたが、退職をして、2019年４月に学習院大学大学院人文科学研究科アーカイブズ学専攻博士前期課程へ進み、保坂裕興先生に指導を受け2021年３月に修了しました。2021年４

この報告は、2023年10月21日（土）に開催された入試説明会に伴う講演会「在学生・修了生の声をきく」の内容に部分的に加筆修正をしたものである。

1――三多摩郷土資料研究会編三多摩郷土資料研究会編『地域資料入門』日本図書館協会、1999年、18頁。

月から2023年３月までは、札幌市総務局行政部公文書館で専門員（会計年度任用職員）として勤め、2023年４月に日本アーカイブズ学会登録アーキビストとなりました。そして、同年４月から江東区総務部総務課文書係公文書等専門員（会計年度任用職員）として勤務しています。

さて、このような自己紹介をすると必ずというほど聞かれることとして、「学費や生活費をどのように工面していたか」があります。もちろん、貯金からの切り崩しはありましたが、その他に日本学生支援機構奨学金（全額返済免除）や学習院大学学業優秀者給付奨学金といった奨学金や、大学院人文科学研究科の特別研究費、行政から支給される住居確保給付金、アルバイトなどで、贅沢はできないものの生活が可能な金額は得ていました。申請が通れば貰えるというタイプのお金に関しては、取得を目指して挑戦してみることをお勧めします。

3　アーカイブズ学との出会い

私のアーカイブズ学との出会いは、学部生時代で、保坂先生がご担当されていた「史料管理学特殊講義」の受講を通じてでした。当時は、単位になるから受けたというだけで、そこまで興味がなかったこともあり詳しい内容は思い出せませんが、アーカイブズ機関である茨城県立歴史館で資料の請求をしてレポートを書いたことを覚えています。保坂先生、本当に申し訳ありません。

では、そのような私がなぜアーカイブズ学専攻に進んだのか。もちろん退職してまで違う道に進む以上、理由は色々とありますが、最も印象的な出来事として、実家で古文書を見つけたということがありました。

その際の話をきれいにまとめると、「ずっと眠っていた古文書を実家で発見」⇒「古文書の魅力に触れ、文書管理や歴史研究に興味を持つ」⇒「アーカイブズ学を学ぶために、アーカイブズ学専攻を志望」という流れになりますが、実際に古文書を見つけた際は「どうしよう」という思いが強かったのが正直なところです。史学科を卒業したものの、資料整理や保存の知識はほとんどなかったため、どうすれば良いのか分かりませんでした。幸いにも国文学研究資料館の西村慎太郎先生に相談することができ、すると先生は茨城大学の学生と共に来て目録作成をしてくださいました。

しかし、目録ができたとはいえ、保存は続けなければなりません。そのための知識が欲しいと感じ、また全国には同じような悩みを持った人や団体があるだろうと思いました。大学院受験時には、民間所在資料を対象に研究計画書を書いたのですが、こうした経験があったことも進学の理由として大きかったと思います。そして、「資料が出てきて困った」

という経験は、各種相談を受けるアーキビストとして忘れてはならない初心だと考えています。

4　大学院でのスケジュール

さて、本題である大学院での研究生活についてです。博士前期課程１年は受講授業数が多く、基礎を固めていく期間になります。そのため、修士論文に関する研究に充てることのできる時間は思ったほど取れないと考えていただきたいです。

私が博士前期課程１年で履修した授業はスライド１の通りです。授業では、アーカイブズやアーキビストについての基礎理論、アーカイブズ管理論、整理記述論、保存論、法制論、情報処理論、レコード・マネージメント論などの幅広い科目を学ぶことができ、様々なディスカッションを通じて理解が深められます。ゼミだけでなく、それぞれの授業の報告でも時に非常に厳しい問答になることがありますが、それが勉強になりますし、真剣に向き合うからこそ院生同士で仲良くもなります。実際、私は充実した学生生活を送ることができたと考えています。

アーカイブズ学専攻の授業以外では、学芸員課程の授業を履修していました。日中仕事をしている方と比べれば時間に余裕はありましたが、毎週のように報告を抱えている時期などは忙しくなりハードでした。ちなみに、学芸員課程を履修したいと考えている方は、この忙しくなる点以外にも注意がいります。「博物館実習」を履修するためには前年までに履修しなくてはならない「博物館に関する科目」が複数ありますが、アーカイブズ学専攻の授業を履修しなくてはならない土曜日などにその授業が入ってしまった場合、修了までに博物館実習に行けない可能性があります。私は行くことができず、「学芸員資格認定」

	月	火	水	木	金	土
1					（前）博物館教育論	**アーカイブズ・マネジメント論研究Ⅰ（アーカイブズ管理論）**
2		博物館概論/博物館情報・メディア論	（後）博物館展示論	資・史料整理法		**アーカイブズ学理論研究Ⅰ（アーカイブズ学基礎理論）**
3					（前）生涯学習概論	**アーカイブズ学演習**
4			（後）博物館経営論		記録保存と現代（TA）	**アーカイブズ実習**
5	**アーカイブズ・マネジメント論演習Ⅰ（整理記述論）**			**アーカイブズ・マネジメント論研究Ⅰ（記録管理法制論）**		
6	**アーカイブズ・マネジメント論研究Ⅲ（史料保存論）**		**（前）記録史料学研究Ⅱ（近現代日本の公文書と私文書）**	**アーカイブズ・マネジメント論演習Ⅱ（情報処理論）**		

スライド１　※現在は一部の授業カリキュラムが変更されています。

という方法を使い学芸員資格を取得しようとして実務経験を積んでいるところです[2)]。

その他、学部の基礎教養科目である「記録保存と現代」ではTA（ティーチング・アシスタント）のアルバイトをしていましたし、授業の合間には学習院大学史料館で資料整理のアルバイトもしていました。特に学習院大学史料館の仕事では目録刊行にも携わることができ、良い経験が積めたと思っています。

5　1年目の大学院での研究

初めに申し上げたいことは「研究は計画通りにはいかない」ということです。

大学院入試出願の際に、研究計画書を提出すると思いますが、実際の研究は恐らくその通りにはいきません。修士論文提出という目標に到達するため、私は博士前期課程１年の内に４、５回は研究計画書を書き直しました。この計画修正時には、資料入手の可能性や研究方法の適切性を検討することが重要だと思います。私はこのあたりの検討が甘かったことから、短期間で書き直したこともあります。

個人的な話になりますが、私がどのように研究を進めたかお話ししましょう。

初めに具体的な研究対象としたのは、常陸大宮市文書館で公開されている「山横目」の文書で、近世の文書管理を調査しようとしました。山横目とは、山林の監理の他、各村の庄屋等の人選、訴訟、警察、それから郡奉行配下の役人の命を受けて地域社会の実情を隠密裏に探る、すなわち情報収集活動を行うなどしていた役職で、この隠密業務によって形成された役人との内々の関係を通じて、地域利害を藩政に反映させる政策提言を行うなどした、地域行政のプロフェッショナルであるといわれます。

こうした古文書を用いた研究では陥りやすいのですが、自分の研究がアーカイブズ学ではなく歴史学の研究とならないように気を付けていました。しかし、度々「歴史学じゃないか」と指摘されていました。部分的にそのようなところがあるのは仕方ないとは思いますが、だからこそ歴史学ではなくアーカイブズ学の研究となるように努力しました。常陸大宮市文書館の活動にも注目し、当時文書館のアーキビストだった髙村恵美さんが中心となっていた古文書講座や古文書調査にも参加しました。髙村さんには本当にお世話になりました。

このようにして研究を進めていきましたが、結果的に「山横目」文書を用いて修士論文の研究を続けることは断念しました。理由は、各種資料の量が修士論文を書ききるには足りなかったためです。もちろん、公開されている資料だけをもって断念したわけではありません。資料所蔵者のお宅を訪問し、同家で現地保存されている資料を拝見させていただきながら、近世以来の保存・活用の在り方や現在の状況を捉えるということも試したのですが、残念ながら困難と判断しました。そのため、１年目の終わりから２年目にかけて計

2――学芸員資格認定については、文化庁、“学芸員資格の認定について”https://www.bunka.go.jp/seisaku/bijutsukan_hakubutsukan/shinko/about/shikaku/（最終閲覧日：2023年11月23日）を参照されたい。

画を練り直すことになりました。

6　2年目の大学院での研究

２年目は困難から始まりました。そう、コロナ禍です。覚えている方も多いでしょうけれども、アーカイブズ機関も図書館も大学もすべて閉まってしまい、まさに「調査などやりようがない」といえる状況でした。研究計画を練り直したばかりでしたので、手持ちの文献から先行研究の調査を進めることはできましたが、やる気は全く起こらず、「修士論文提出は３年目でもかまわない」などと考えてしまうこともありました。

やる気が起きなかったり、良くない思考に陥るといったことは誰にでもあると思います。どのように回復するかは人それぞれだと思いますが、私の場合、叱咤激励の叱咤が利き、人からの声をエネルギーにすることが多いと感じています。この時も様々な方に相談をして、自分の方向性を探るとともにエネルギーをいただきました。皆様大変な中、ご迷惑をおかけしたと思いますが、感謝しています。

さて、私は「近世大名家文書の伝来と分類に関する研究―常陸笠間牧野家文書を対象に―」というテーマで修士論文を執筆することにしました。牧野家は老中も務めたことがある譜代大名で、その資料群について現在までの管理の変遷とそこにある記録の一部を業務に関連付けて表現することを目指した研究になります。

様々な苦労がありましたが、特に大変だったことが２つあります。

１つ目は目録作成と撮影で、自分の整理用に目録を作成しなくてはならなかったことと、コロナ禍のために閲覧時間が１日１時間（途中から２時間）と限られている中、資料を公開している茨城県立歴史館に毎日通って紙焼きの資料を撮影したことです。撮影はなかなか進まず、修士論文の中間報告会が開かれる６月の時点でもまだ終わっていませんでした。これについては、最終的にすべてを撮ることは諦めました。２つ目は原本について調べることです。常陸大宮市文書館の話に似ていますが、こちらは笠間稲荷神社で原本が保存されているため、保存状況や所蔵者の資料との関わり方について現地で調査しようとしました。夏頃に調査をさせていただきたいと書面と電話でお願いをしたのですが、許可の連絡が10月末になっても来なかったため、こちらから催促するのは失礼だと思いつつ、連絡をして許可をいただくことができました。この現地調査の内容で１章分に近い量を書くことができたのですが、その際に伺ったお話で、こちらの調査依頼の意図が上手く伝わっていなかったことで、許可がなかなか下りなかったということが分かりました。個人や団体、企業などを対象に研究をしようとしている方もいらっしゃるかと思いますが、調査内容によっては許可を得る必要がある場合もありますので、早めかつ計画的に進めることをお勧めします。

修士論文について反省を述べると、推敲は必ずする、事実関係は確認する、自分の考えを明示するということがあります。どれも当たり前にできることと思われるでしょうけれども、まず締め切り間際まで執筆すると推敲時間が足りなくなります。自分の修士論文を

読み返すと、内容よりも推敲不足で恥ずかしくなるとともに、読みにくい論文を読んでくださった先生方に申し訳なくなります。また、事実関係について致命的ではないものの間違った部分があり、口述試験で指摘された際には真っ青になりました。最後に、自分の考えの明示についてです。致し方ない場合もありますが、論文の核心部分で「～だろう」というようなぼかした表現を用いないことや、既存の目録などを批判する時に自分なら「このように目録を作成する」と例示することです。これが十分にできていなかったために、修士論文を読みなおすと不完全燃焼感があります。批判が一切出ない完璧な論文など不可能ですが、こうした反省点は現在も気を付けるようにしています。

7　博士前期課程で得たもの

すべてを語り尽くしたわけではありませんが、以上のような博士前期課程の日々を通じて得られたものについてお話しします。

まず、専門的かつ体系的な理論と調査能力の基礎は２年間で自然と身についたと思います。これらは、アーカイブズ機関で働いていると役に立つのはもちろんですが、働きやすさに繋がると思います。何のためにするのか、この後何をするのか、何が必要かを理解していれば、１年目であってもある程度は業務についていけます。学習院のアーカイブズ学専攻出身というと理論ばかりの「頭でっかち」と見られることもあるのですが、着実に仕事をすることで徐々に認められ、提案にも耳を傾けてもらえるようになります。

得たものの中で最も重要だと思うものは貴重な縁です。ここまで、いろいろな方に助けられながらやってきたという話をしてきました。指導をしてくださった先生方、尊敬できる先輩方、一緒に高めあう同期との縁は一生ものの宝だと思いますし、学会や調査などで出会った研究者やアーカイブズ機関のアーキビストは、先生であり仲間でありライバルでもあります。こうした方々との交流から研究やキャリアに繋がることも多々あると思います。また、自分が学んでいることを認めてくれる他業界や一般の方もいます。応援してくれる方や思わぬ視点から助言をくださる方だけでなく、私の場合、一緒に仕事をしている企業の方もいますし、旧華族の子孫で近代資料の調査を依頼してくださる方もいます。学外に出ると思わぬ縁が形成されることがあります。せっかくですから、積極的に動いてみてください。

8　修了後のキャリアについて

修了後は札幌市総務局行政部公文書館で勤務をしました。そこではアーカイブズに関するあらゆる業務を担当することになりました。地方の公文書館の場合、人員が多いわけではないので、なんでもやります。受入、評価選別、目録作成、保存、公開審査、レファレンス、展示、刊行物への執筆など、やることは多くあるため、飽きる暇はありません。個人的には、仕事の基礎になってくる親組織や地域に関する知識の習得は大変でしたが、１

年程した時にその知識量から「昔から住んでいるよね」と常連利用者の方に仰っていただけたことは非常に嬉しかったです。

仕事が多岐にわたるなか、アーカイブズ学専攻で学んだことは随所で活かされたと思います。その中で、思い出に残っていることがあるので紹介します。入職して２週間ぐらいだったかと思いますが、公文書館にアイテム単位であれば数万点に及ぶ大量の古い道路台帳が、電子化されたことをきっかけに移管されました。道路台帳というのは、道路法に基づいて道路管理者が作成している道路の台帳で、路線名や道路の区域・幅員など、道路に関する基礎的な事項を示したものです。受入時の作業は、はじめに多くの箱を受け取り、中身と移管対象のリストとを照合し、確認できたら排架するというもので、その後、公開に向けて資料の整理作業を任されました。皆さんならこのような状況になった時どのように行動されるでしょうか。

私は最初に、この移管の件に関する原課との打ち合わせ記録や、公文書館で受領したデータなどの確認をしました。これにより、前年度からの動き、資料の特徴、どのような管理が行われていたか、どのような利用者がいたかという情報が得られました。しかし、点数が点数だけに１点ずつ目録をとっていては、利用できるまでにどれほど時間がかかるか分かりませんでした。そこで思い出したのが、博士前期課程１年目で学んだテキスト*Keeping Archives*でした。そこには、記録作成機関が作成する管理記録は、それ自体がアーカイブズの記録であり、アーカイブズの目録などのツールに組み込むことができるということが書いてありました[3)]。管理台帳の類を受け取ってはいなかったので、すぐに原課に確認し、エクセルのデータを入手しました。確認の結果、それほど苦労せずに公文書館用の検索ツールに利用できるものであることが分かりました。整理中に、利用をしたいという市民からの問い合わせが何件も入ってきていましたので、早めに整理を終えることができてほっとしました。もし、管理台帳がない、あるいは紙しかないという状況であった場合は現在でも整理が終わっていなかったかもしれません。現用の部署とアーカイブズの部署が協力することの重要性を体感したといえます。

この話もそうなのですが、資料や情報を提供する側になったことで、「管理や公開を如何にするか」ということをより深く考えるようになりました。今も日々模索しているところですが、資料にとって理想的な環境をつくりつつ、利用者に資料の情報が届くようにし、自分たちが働きやすいようにするためにはどうすれば良いかということを入職後は特によく考えるようになりました。私のアーキビストとしての基礎は札幌で形成されたと思っています。

現在は江東区総務部総務課文書係において、アーカイブズに関する業務を担当していますが、前職とは所蔵する資料や例規に違いがあるため、以前と同じ働き方ではありません。自治体が違えば事情も違うということです。しかし、仕事の基本となる部分は同じである

3――Jackie Bettington, Kim Eberhard, Rowena Loo, Clive Smith eds., 'Keeping Archives 3rd ed'., The Australian Society of Archivists, 2008, p.389.

ため、前職での経験は活かすことができています。

9　最後に

時間もなくなってきましたので、最後に「大学院に進学したら、やりたい研究を見つけて全力で取り組んでいただきたい」とお伝えしたいと思います。

入試を突破した後は、早めにやりたい研究を模索してください。入学すると自由に研究ができる環境が手に入りますが、修士論文提出までには２年もありません。時間がなくなってしまうと、「やりたい」ではなく、「やれる」研究をしなくてはならないかもしれません。そして、やるからには後悔がないよう全力で取り組んでほしいです。その努力は、仮に少し遠回りになることがあったとしても必ず自分に返ってきますので、恐れずに挑戦してもらいたいと思います。

ご清聴いただきありがとうございました。